



# 今日の問題

政府は先週末の閣議で、太平洋戦争の生存者救済と遺骨の取戻について、計画をわけておいて振舞う方針を定めた。横井庄一さんと二体の遺骨のタイム風刺の報道が、政府を動かしたきっかけである。

二十八年間の

ゾングル生活

## 遺骨さがし

井さんの出現は、全国民に衝撃を与えた。羽田に降り立った横井さんが「せんご、日本は、どういふ戦いがあるかもしれないか……」と語り、「銃は使ったこと、お返しします」と続けたとき、人々はさらに複雑な面影をつけた。

一方、盛大な横井さん歓迎隊のおかげで、志知村夫妻や、中尾信さんの遺族が、厚生省の粗大な救済を知られた。遺骨の前でむきむき泣く姿は、国民の心をこわ

つけた。

厚生省救済費の調べによると、約百四十七万人とみられる海外戦没者のうち、これまでに九十一万六千余体の遺骨が取り戻されたという。戦没者のなかには遺骨を残さなかった人々がいるので、遺骨の生存者と調査上の数との間にはかなりの差があるのが、多くの遺骨が帰郷に届っていないことを意味している。

その他國はフィリピン、ビルマ、インド、東部ニューギニア、ソロモン、中国の東北

ところで、戦時中日本へ強制連行されて死した中国人の遺骨十二体は東京、小石川の区運送所、朝鮮出身の旧日本軍人・皇族と二級人の遺骨二千八百三十三体は東京・中目黒の狛犬寺に安置されたままである。中国への送還が断れているのは政府に懸念がなかったためだし、韓国への送還が断れているのは敵国との対立感情が解けないからである。閣議の決定は当然のことだが、同時に母国的な印象もぬぐえない。江陰防衛庁長官は閣議後「自衛隊が沖縄に配備されれば真先に遺骨を……」と語ったが、これほど政治色があつた見解を述べている者もいた。生存者の救済と遺骨の取戻は国民の要求である。しかしそれは、日本人が戦場とした各地域との間に、友好関係がもたらなければならない。歴代自衛隊内閣はその努力をつくしたであろうか。風船をもちつてみても、あるいは生存者を救済、あるいは遺骨を待つ人々の心はいつまでもたぬく。